
最弱最低な転生ネギま

Goof

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱最低な転生ネギま

【Nコード】

N5631Q

【作者名】

G o o f

【あらすじ】

ネギまの世界に転生したけど、戦闘能力は一般人にも届かない子供級。

なぜなら転生特典は、『他人が自分に好意を寄せる能力』だったからです。

能力を駆使して、みんな仲良く平和に暮らすことが目標の物語。

時と転生の部屋（前書き）

処女作です。生暖かい目で見ていただけると、お互いにダメージがないかと思われます。

時と転生の部屋

「どうやら気づいたようだね」

気がつくとなんだかふわふわした空間にいた。

「こんにちは」

目の前の優しそうなお兄さんが声を掛けてくる。
とりあえず返事しておこう。

「こんにちは？」

「うん。よかった、意識ははっきりしているみたいだね」

「えっと、ここってどこか聞いてもいいですか？」

「そうだね。それも含めて説明させてもらうよ。立ち話もなんだし、座ろうか」

そう言ってお兄さんが指をパチンとはじくと、僕とお兄さんの間に、応接室にありそうな、向かい合わせのソファとテーブルのセットが現れる。

「し、失礼します」

座れといわれたので座ろう。

僕はなんだか夢みたいだな、と思いながら手前のソファに腰掛けた。

「はじめに断っておくと、これは夢じゃない」

お兄さんも同じようにソファに座る。腕を組んであごに手を当てる。

「ここは君たちの言葉でいうなら死後の世界ということになる。

そして私は、天使……かな」

「……天使って髪の毛黒かったんですね。もっと西洋風かと……」

お兄さんの視線と沈黙にとっさに返した質問は我ながら間が抜けていたと思う。

「ふふっ、私の姿形は君たちの受け取り方次第だからね。

君でなかったら私はこの姿ではないのさ」

苦笑して、あごにおいていた手で髪に触れるお兄さん。

「本題に入ろう。死後の世界といったが、残念ながら君は既に死んでしまっている」

「そう、ですか」

現実味がないから、ショックも何も無いな。

「うん。覚えてはないだろうが、今の君の性格や考えに影響しているのは、

間違いなく前世の君の人生によるものだ」

わかったようなわからないような。

「難しい説明は省くが、君は座れと言われてテーブルではなくソファに座ったし、

天使という概念が一般的に西洋的なもので、黒の髪がそれにそぐわないことも知っている」

そんなの当たり前だ。

「しかし君は、今まで君が歩んできた人生を覚えているか？
自分の名前を思い出すことが出来るか？」

「あれ……？　　そういえば、全く思い出せないです」

「うん。死後の世界にきたものは全てそうなるんだ。

多くは死んだ瞬間や死に至る境遇によって心を乱されないためにね」

人生であった良かったことも思い出せなくなるのはちょっと嫌だけど、

事故で死んで残された家族のことを悔いたり、不幸な身の上の人もいたりするだろう。

確かにそういう意味では適切な処置なのかもしれない。

「……本当ならば、ここでいくつか話を聞いた後に転生してもらうことになるんだが、

そのときに改めて全ての記憶を消させてもらうのさ。

さっき話した生活習慣から、君の性格や考えをね」

そこでお兄さんはソファに座りなおして、こっちに顔を近づける。

「しかし、君には特殊な事情があってね。

今の記憶を持ったまま、転生してもらうことになる」

なにか引っかかる言い方……

「特殊な事情？」

「……聞きたいか？」

お兄さんが「聞かないほうがいいと思うけど」と目で語っている。

「いえ、いいです……」

「うん。話を続けよう。」

記憶を持ったまま転生してもらう理由としては、
『君の記憶の中にある世界』に行ってもらうためだ」

「何か回りくどい言い方ですね。地球じゃないんですか？」

「地球の場合もあるさ。創作上のね」

お兄さんは姿勢を崩してソファに深く座り込む。

「転生する先は、君の好きな漫画やゲームの中の世界ということになる」

苦笑いを湛えるお兄さん。こっちはなにかちょっと馬鹿にされた気分。

「僕が決められるんですか？」

「そういうことになっているね」

責任重大……。

「ああ、あと好きな能力も付けられるんだったな」

「へ？ それも漫画やゲームのですか？」

「うん。それでもいいし。別にそれに限るってわけでもない。

……時間はいくらでもある。ゆっくり考えてくれてかまわないよ」

そう言いいいながら足を組んで、やっぱりパチンと取り出した分厚い本を読み始めるお兄さん。

凄い話になってきた。

だけどこれは慎重に考えないといけないな。

といっても、ドンパチ戦ったりするのは、馬鹿ですっとうい自分に行けるとは思わないし、

できればちょっとファンタジーな世界で、僕のことを好いてくれる子とゆっくり暮らしたい。

でも、僕みたいなのを好きになってくれる子なんていないよなあ……。

ファンタジーって言ったら危険なことに巻き込まれることもあるだろうし……。

そうやって悩んでいた僕。既にどれくらい時間が過ぎたのかは覚えてない。

「あ、あの……」

「うん？ 決まった？」

本から顔を上げるお兄さん。

「はい。決めました」

「じゃあ教えてくれるかな」

ボタンと本を閉じると、足を直してこちらに向き直ってくれる。

「転生先は『魔法先生ネギま！』の世界を希望します。

能力は『他人が自分に好意を寄せる能力』。

庇護欲や恋愛感情を植えつけたり増幅させたりできると良いかな
……って」

「ふうん。それだけでいいの？」

「能力下の対象がこの能力に絶対に気がつかないで、
持った感情を自分で都合よく解釈するってことだけ確実にお願いします。

それと効果が薄くなっても全世界に届くくらいの射程距離で、
好意の寄せ方はある程度僕が自由に決められさえすれば……、
あ、あとこんな能力を持ってるのが大の大人だと格好がつかない
ので、

できればずっと子供のままだいいかな、と思うのですが……」

ネギまの世界には年齢詐称薬もあるし……。
でもなんかお兄さんの視線が冷たい気がする。

「能力に関してはそれくらいなら大丈夫かな。

子供っていうと何歳くらい？」

「うーん。主人公のネギ君と同じ……かな」

「不老自体は問題ないけど、そうすると普通の生まれじゃあできないね。」

いきなりその年のまま転生してもらうけど、それでいいかな？」

「だ、大丈夫です」

よし、わかった。とお兄さんがソファから立つ。

それにつられて僕もあわてて立つ。

するとソファとテーブルが一瞬で消えてしまう。

「では、早速取り掛かろう」

お兄さんが両手を上げてなにやらブツブツと唱えると、

僕の足元から暖かい光のようなものが溢れ出てくる……！

「新たな生を歩む者よ。君に幸あれ！」

僕の意識は途絶えた。

好かれなければ生き残れない

「ここは……」

気がついたら森の中。やけに木が高いなあと思ったけど、視点が低いのか。

あたりは暗く、やっと目の慣れてきた僕に、この場所は見覚えがなかった。

といっても、ネギまの世界に見慣れたところなんてないわけだけだ。

とりあえず人のいる場所に行かなければ話にならない。

そう考えて、一步を踏み出そうと……

「誰だ！ 麻帆良の者か！」

大きな声にビクッと反応して足を止める僕。
どこからか分からないけど、男の人の声だ。

「余計な真似はするな。命を縮めるだけだぞ」

なんだか物騒なことになっている……。

これはまずいんじゃないかな、と、とりあえずもらった能力を使ってみよう。

「……！ ガキか、ここの制服じゃあないようだが。」

まさか同業者ってわけでもあるまいな」

あれ？ あんまり効いてないのかな。

今は漠然とした『好意』を与えている状態だけど、もっと絞ったほうが効果があるのかな？

「いや、同業者だよ」

『同業のよしみ』という感情を刺激してみよう。

「ほう。するとその姿と抑えた魔力は魔法生徒に紛れ込むためってわけかな。

同業者として忠告しておくが、いくらここの制服が手に入れ辛いからと言っても、

せめて似たような服を着ておくべきだな。逆にその格好じゃあ不自然だぜ」

地面に物が落ちるような音がして、後ろを振り向くと黒っぽい服装の男の人。

「まあ、そういうわけなら俺らが争う義理はないな。

どうだ、ここで会ったのも何かの縁だ。俺でよければ協力するが」

長い草を踏みしめながらこちらへ近寄ってくる黒装束。

おお、効いてるっぽい！

普通こんなに上手く話進まないよね。警戒心も薄れてるのかな。

……でも、なんて答えようか。話的に麻帆良学園に侵入しようとしてるんだよね？

「ん、ああ。俺の素性が気になるか？ 俺はな、こう見えても……！！」

もう手の届く距離まで近づいていた男の人が舌打ちをしながら、僕の
の手をとって飛び退く。

「銃声だ。まさかここまで索敵されてやがるとは。まだ結界を越え
たばかりだぜ」

そういえば破裂するような音がしたような気もする。サイレンサー
って奴？

でも、侵入者を狙うってことは麻帆良の人だね。保護されたほう
が いいのかな。

よし、じゃあ能力を『力の信頼』にベクトルを……って感じでいい
かな。

「僕は大丈夫だから、先に逃げてください」

「おっと、一人の方が動きやすいタイプか。」

そういうことなら任せるぜ。俺は無駄な戦闘は避ける性質でね」

また会ったらよろしく。と、短く言い残して後方の森へ消えていく
男の人。

追うように銃声も鳴っていたけど……大丈夫かな？

パシュッ……

「もーいーい」

苦しい……猿ぐつわ咬まされてるし、手は縛られてるし、背中はこの

れ、樹か。

もう夜が明けてるってことは、僕寝てたのかな。だけどこの格好は……。

「起きたか」

声のほうに目をやると、長身褐色、黒髪ストレート、手には銃器のスナイパーな女性。

龍宮真名がそこにいた。

そういえば記憶が途切れる前に、銃声してたけど、彼女が撃ってたのか。

どこか痛いところ……あれ、身体が上手く動かない……麻酔銃かな。

と、とりあえず『好意的』に話してくれると助かります……。

「君のような子が夜に出歩くのは感心しないな。

……杖も武器もなさそうだが、君の所属はなんだ？ 吐けば楽になれるぞ」

「もぐもぐ」

銃を向けて話すのが彼女の『好意的』なのだろうか……。

「動くな」

パン、と短く銃が鳴って咬まされていた布がはらりと落ちる。

あ、危なくないですか……いくらなんでも……死ぬ死ぬ！

『庇護愛』！ 傷つけないでください！ 柔らかいから本当に死ん

でしよう！

「む。本当に防衛手段もない。
魔力を隠している様子もない……まさか一般人か」

そうだよそうだよ！　ここで頷くわけにはいかないけど、何にも事情知らないんです！

とりあえずやることは沈黙だ。話が分かっては一般人じゃあなくなってしまう。

演技するまでもなく怯えてるので、後は勝手に分かってくれる！

……といいなあ。

「君、怖がらせて悪かった。

しかしどうしてあんな場所にいたんだ？　一緒にいた男は？」

お、拘束を解いてくれるみたいだ。

しかしどう答えたらいいんだろう。下手な嘘はばれちゃいそうだし……。

「……分からないんです。気がついたらあそこにいて。

男の人も、いきなり話しかけられただけです。どうしてここにいるんだ、って」

「嘘にしては下手すぎるな。視たところ危険もないだろう……。ほら、立てるか？」

呟くように言い、最後だけ僕に声を掛けてくれた。

「ごめんなさい……体が上手く動かなくて」

「そうか」

そしてお姫様抱っこである。

うう……たつみーの顔が近い。近くで見ると本当に『可愛い』なあ……。

もしかしたら綺麗って言ったほうが正しいのかもしれないけど……。

「君……」

あ、いくらなんでも至近距離でガン見してれば気づくよね。

彼女は足を止めて、僕がしたようにじっとこちらを見返してくる。て、照れる……。

「……あまり、じろじろ見ないでくれると助かるな」

それだけ言うと、前を見直して再び進み始めるたつみー。

そういえば、どこ行くんだろう。まさかこのままお持ち帰りコース……！

ってそんなわけないか……。

命名センス…もっと頑張りました

「さすがに、この先は自分で立ってくれ」

「はい」

歩くこと数十分。見覚えのあるようなないような校舎に入っただと思っただ、

これまた見覚えあるようなないような大きな扉の前に到着。

もしかしてなくても、これ学園長室だね？

いまからでも『人畜無害』オーラを出しておいたほうがいいな……むむむむ。

「失礼します」

ドアを叩いて入っていくたつみー。

目配せで僕にも着いて来いと言っている。もちろん従う。

中は広い空間。さっきの廊下よりも天井が高い気がするののは気のせいだろうか。

敷き詰められた赤絨毯の先には、大きな窓と大きな学園長席。

当然、そこには仙人！　って感じの学園長が座っている。朝早くからご苦労様です。

「おはようございます学園長。彼が先ほど連絡した不審人物です」

不審人物扱い……まあ、わかってたけど。

「おはよう、真名君」

ヒゲを扱きながら挨拶をする学園長。
そしてゆっくりと僕に視線を移す。

「ふむ。見たところただの子供じやのう」

「私も確認しましたが、戦闘能力も身体に何か仕掛けられていると
いうこともないようです」

寝てる間に調べられてたみたいですね。

「そうかそうか……ぼうや、名前はなんと言うのかの？」

やっと名前聞かれた！

たつみーに抱かれてる間、ずっと聞かれないかドキドキしてたのに
聞いてくれないんだもん。

そのお陰でゆっくり考えることができたので、別に良かったんだけど。

「……コギ・シューイです。古いお城の秋の意味で『古城秋意』」

特に意味はない！　しいて言えば年が同じネギ君をちょっと意識したかな？

「ふむ、では古城君。少しワシの方へ来てくれんかの」

魔法でプライバシー侵害の予感！

でも僕じゃあどうしようもない……。

「は、はい」

人間諦めが肝心である。近づく。

「では、手を出すのじゃ」

気休めに頭の中を読まれないように、思考で脳をいっぱいにするんだ！

僕を『嫌わないで』、僕を『嫌わないで』、僕を『嫌わないで』！

学園長が僕の出した手の甲に軽く触れる。

「……むむ、古城君。ここに来るまでの記憶はあるかの？

正確には、裏の森に入る前の記憶じゃ」

「ごめんなさい……何も思い出せなくて」

「そうか……。古城君、悪いとは思ったが君の記憶を少し覗かせてもらった。

しかしの、君の記憶は数時間前までしか辿れなかった。君が森へ入ったところじゃな」

あの転生の間（仮）は覗けないのか……。

「それともうひとつ。真名君、古城君を視たときに気づかんかったかな？」

急に話をたつみーに振る学園長。

僕も彼女のほうに振り向くと、左目にやけに力が籠っているたつみーの姿が……。

「先ほどは念入りに視なかったものでわかりませんでした、これは……身体を巡る力の流れが人のそれとは異なるようですね」

「そうじゃな。詳しく調べなければ断言は出来ぬが、おそらく何らかの手段で不老性を持たされておるのじやろう」

「不老性……」

「え」

なにそれ学園長凄い、ちょっと触っただけで分かっちゃうのか。能力のことはバレてないよね？ 話題に上がらなかったし大丈夫だよね……？

「好意的に解釈するのなら、何者かによって不老の実験体にされ、記憶を消されて麻帆良に捨て置かれたというところかの」

「自らの手元において置かない理由は」

「管理できない状況になった、もしくは麻帆良でも十分経過を監視できる状態にある……」

たつみーと学園長が僕の存在理由について話し合い、お互いに考え込んでいる。

この様子だと、能力のお陰で悪者認定からは逃れられたのかな。

僕の処遇はどうなるのだろうか。

学園長に頼ったら小学校に通わされそうだね……あれ、小学校寮なんてないのか？

うーむ、どうせ頼るなら女の子のほうがいい……ここはたつみに頼ってみよう！

『責任感から来る庇護欲』をたつみーに向けて最大出力！

「学園長」

「む？」

「私がこの子を預かります」

「ほっ?! いや、古城君を見つけたのは確かに真名君じゃが、責任を感じることはないんじゃないぞ」

「学園長の方から龍宮神社の方へ話を付けていただければ、住む場所は都合がつかますし、

金銭面でもご支援いただけるのでしょう？ それに……私も個人的に彼に興味があります」

さすがに女子寮の部屋ではなかったみたいです。

でも怪しい子供を住まわせてくれるだけで、たつみーにあるまじき行動。能力万歳！

「ふむ。その条件で真名君がいいのなら、ワシの方も助かるの。

もうすぐこっちでも一人、子供を受け入れる準備をしなくてはならんのでな」

まさかネギ君フラグか！ そういえばいま何月何日なんだろう。

確かネギ君来るのが3学期だね……朝錬している女の子たちがいたから、3学期もう始まって？

とりあえず黙って聞いてたほうが、話がややこしくならないだろう。後で確認だな。

「そうじゃの。後は定期的にこっちで医者を出すくらいかの……」

「では、授業が始まる前に連れて行きたいと思うので、この辺りで失礼します」

たつみー優しい！

「ふむ。古城君、君の面倒は彼女の家が見てくれることになった。今後の詳しい話も彼女を通して伝える。いきなりで申し訳ないが大丈夫かのう」

学園長を見て、たつみーを見て、もう一度学園長を見る。

うーん、大丈夫だよな、今の話って普通の9歳児について来れる内容だったかな……。

この期に及んで謀られてるってことはないと思いたい！

意を決して軽く頷く。

「賢い子で助かるの。では、すまんな真名君。」

こちらから龍宮神社に連絡はしておく。後は任せたぞい」

「失礼しました」

たつみーについて行き、退出。

ふむ、医者に身体を見られる分には大丈夫だと思っただけど……、定期健診とか病弱キャラか！　って感じだよな。

「急ぐぞ。掴まっていなさい」

んお？ あれ、真名さん……またこの体勢で抱っこは良いとしても、なんで廊下の窓に足を掛けてるのですかね。見るからにここ1階じゃないですよね……。

タツと軽く窓のサッシを踏み切って、外に跳躍する僕たち。

ひいひい……！

子供でも高いところから急降下すると、下半身がきゅっとするなんて、別に知らなくて良かった……。

さっきの話といい、これといい、麻帆良の人は認識阻害結界を過信しすぎじゃあないですかね！？

命名センス..もっと頑張りましょう(後書き)

2／3 学園長の一人称等修正

気は病から！

「ゴホ……ゴホ……」

八畳間の真ん中。布団を敷いた上に寝転がる僕。

ずずーっ、と鼻をすすってみたり咳していたりで、どうみても風邪です。本当にありがとうございました……。

龍宮神社にお世話になって早3日目。

たつみーに抱かれてここに運ばれるときに、学園長室で聞かされてた話を噛み砕いて説明してくれました。

あの時してなかったような詳しい話もされたので、

悩みこんでいるように見えたときにでも、念話してたのかな？

とりあえずどうやら、僕が不老なので魔法関係は全部ばらしちゃうみたいですね。

確かに僕もそのほうが動きやすいので、いいことはいいのですが、……ちゃんと守ってもらわないと、すぐ死にそうですよね。

その話の途中で、自分が病弱キャラだったら設定がそれっぽいな、との考えの下、

能力を風邪ウィルスを対象にして使ってみました。

いや、ダメで元々だったけど、まさか成功するとは思わなかったんです。

いまいち力の加減が分からなくて、龍宮神社に着いた後でぶっ倒れちゃいましたけどね！

風邪菌に『好かれる』人間ってやっぱりいるんですね……。

「だいぶ熱は下がってきた……かな？」

布団から上半身だけ起こして、軽く頭を振ってみる。
頭が熱っぽくて重いのも、楽になった気がしないでもないです。

ああ、そうそう。

日付の上では昨日で2月が始まったみたいですね。

詳しい本編の開始日時は覚えていませんが、学園長が来るっていうんだから来るんでしょう。

積極的にネギ君にどうしようというわけではないんですけど、仲良くなるにはこしたことありませんよね。なんとか明日くらいには治ってほしいところ。

ぼんやりと眺めていた廊下側の障子に人影が映る。

この時間はまだたつみーは学校だから……

「ん？ 起きとったか、粥があるが食べられそうかい？」

神主さんですね。

優しそうなつるつる頭的眼鏡のお爺さん。

龍宮神社に着いたときに紹介されたんですが、そのときから『家族愛』を当て続けているので、

僕のことを孫のように思ってくれていると助かります。

「はい、熱もちよつとは下がったと思います」

「そりゃあ良かった。今、取ってくるからな」

その後、お粥を食べて、やっぱり寝る僕。

風邪治す魔法ないのかな、状態異常回復魔法じゃあダメなんですかね……。

境内で朝の日差しを浴び、大きく伸びをする僕。

「治ったー」

本日、龍宮神社生活5日目です。

まだちよつと鼻がずるずるするけど、もう大丈夫でしょう。

ただの風邪でこれだけ長引くって、本当にこの身体病弱なんじゃあ……と、

臥せている間に何度思ったことか。

都合のいいときに病欠できることは分かったけど、今度はもつと軽く治るように調節しないと……。

「うう……寒い」

さすがにちよつと朝は寒い。

着ているのが神社の作務衣っていうのだろうか、薄地の着物みたいなものに、

上一枚羽織っただけだしな……そりゃあ寒いかな。

また風邪をひいてはたまらないので、中に入ってストーブに当たろう。

「もう、随分と良くなったようだな」

玄関で制服姿のたつみー。

といっても、さつき朝食の席で会ったばかりだけどね。
寮には帰らずに、僕の具合が良くなるまでこっちに寝泊りしてくれてみたいです。

彼女には相変わらず『庇護欲』しか流してないので、別に僕のことスキスキ！　というわけじゃあないでしょうが、効き目凄いですね！

「はい、おかげさまで！」

気分がいいとテンション上がってしまう。

なんせこっち着てからほぼ寝てたからね！

今日から、まずは身体を丈夫にするために、健康法的な気の使い方
を教えてくれるらしいので、

いやがうえにも期待が高まって、気分が晴れやか！

「……それは良かった。私は学校へ行く。また放課後に」

神主さんは知ってるけど使えない系の人らしいので、
僕の魔法先生は必然的にたつみーになるわけですね。

あのたつみーが！　人に物を教えるところなんか想像つかないのに！
ってちょっと失礼でしたね。ごめんねたつみー。

そういうわけで、鳥居をくぐるたつみーを見送って、

僕は僕で今のうちに本で気の扱い方を予習しておこう。

本の内容は9歳児には難しいのかもしれないけど、
不老がいつ始まったかなんて正確なところは多分わかられてない
と思うので、

ちょっと不自然でも分かるってことにしちゃって良いよね！

こういうときに曖昧な設定って楽だなあとあります。

そして、数時間後。

万年床になる勢いだった布団も片付けられ、

いつもの部屋で座布団を敷いた上に寝転がって、気の扱いの本を読み進める僕。

しかし、僕のリアルな頭脳でも、気の学問書は難解だということが良く分かりました。

違うよ！　なんだか漠然としすぎてるんだよ！　習うより慣れろ系なんだよ！

本編で気の扱いが得意そうな奴が、脳筋っぽい理由がよーっくわかったよ！

……失礼、取り乱しました。

何とか頑張って覚えられると……いいな。

フォースの力を信じたら負けだと思っている

「コーホー……コーホー……」

お昼前の日差しが暖かくなってきた頃。境内にて。
現在、気の修練中です。

やってることは、空手の型とか太極拳とかそんな感じのかな？
呼吸を整えながら、決まった動きをするという練習法です。

習い始めてから一週間くらいたったと思います。
教えてもらった当初こそ、覚えることも多くて、終わったらへとへとでしたが、

今ではちよつとハードなラジオ体操感覚くらいには慣れたでしょうか。

たつみーの講義によって判明した気の情報をもとめると、

本格的に気を扱うようになるには、

長い年月の厳しい修行が必要のようですね。

気を修める人々は、その修行の中で自然に気を会得していくのだとか。

そもそも気というものが、人に宿る生命エネルギー的な何かだそう
で、

気を扱うということは、そのエネルギーを燃料にして爆発的な力を
得る、

要は、人間の行う火力や原子力発電みたいなものらしいですね。

だからこの世界では、感情の起伏で気の強さが変わったり、

逆に超強力な気の発露をするには、豪胆な精神力が必要だったり
という考えのよう。

やっぱり、気使いⅡ脳筋説あつてみたいです……。

説明を聞いて、僕みたいな屁理屈をこねるようなタイプには、根本的に向いてない気がしましたが、

今、行っているこの健康法は、あくまで気の自覚による、生命エネルギーの体内循環正常化が目的みたいです。

そうすることで強い精神、強い身体が作られるのだとか。

まあ確かにジョギングや整理運動的な延長線上にあるというのは良く分かります。

「ふうー……」

これで今日の分は終わり。

「考え事でもしてたかい？　キレが足らんぞキレが」

僕が声に驚いて跳ねるように振り返ると、

拝殿の上には、野球中継を見て最肩の選手に檄を飛ばすファン、といった表情の神主さん。

「……はは、ちよつとしてました」

いつの間にか見られてたみたいです。

境内で教えてもらったので、その流れでいつもここでやっていましたが、

そういえば拝殿から丸見えだなあ、と今更ながらに思いました。

この健康法自体は、たつみーから手取り足取り教えてもらったのですが、

そもそもたつみーも神主さんから昔に伝授してもらったそうで、神主さんは前にも言ったとおり、気も魔法も使えないので、これが続けたからって自然に気が使えるようになるようなものでもないようです。

ちなみに、神主さんはもう年なので身体が動かない、といって、たつみーに教えるのを丸投げしていました。腰に持病があるらしいですよ。

「あの、神主さん。気じゃなくて魔法についての本って、ここにありますか？」

気について少し勉強して、僕には魔法の方が向いてる、と思った次第。

神社に上がりながら、神主さんに聞いてみます。

「そうさなあ。先代の符術やら陰陽術のものなら少しはあるが……。職業柄か、かなり専門的なものになるぞ。覚えるには向かん」

あごをさするように困った顔の神主さん。

「ここがないなら……。心当たりありませんか？」

そういえば龍宮神社からほぼ外に出ていないので、図書館島というキーワードを知らない僕。

一緒に買い物や簡単なお使いはしたけど、さすがにそっちまでは行かなかった。

「書物といえば図書館島……」

しかし、魔法書が一般観覧できるところにあるかと言われれば……むむむ」

更に困った顔。

まあ確かにいくら魔法を知ってるからって、僕生徒じゃないし入れないか。

「あ、いや。無理にとは言わないので……その、大丈夫ですよ？
急ぎでもないのです」

「何、そう遠慮するでない。他ならぬ秋意の頼み！
ワシが叶えんでどうする。まっとれ、今、学園長殿に連絡するで
な」

おお……可愛がられているのは嬉しいのだけれど、
話を大きくしちゃったのは、ちよつと申し訳ない気がする……。

結局その後、初心者向けの教本をいくつか見繕って届けてもらえる
ことになりました。

図書館島に直接いけなかったのは、少し残念だけれど、
好奇心からきたそんな大層でもない目的は果たせたので、神主さん
には感謝です。

しかし、今日の出来事はそれだけではありませんでした。

今日は部活はないはずなのに、随分遅くに顔を見せに現れたたつみ
ーによると、

ついに「子供先生が来た」とのこと。

遅くなったのは、歓迎会をやっていたからだだったんですね。

もうたつみーは寮で寝泊りに戻っているのです、わざわざご足労申し
訳ない気持ち。

それはそれとして、ついに本編開始みたいですネ。

しかし、今のところネギ君関係には特に積極的に関わるつもりはありません。

話の流れが正史のようにならなくて、バットエンドなんて、シャレにならないですからね！

いや、まあ僕みたいな矮小な存在がそんな変化をもたらせる可能性は低いですが、

バタフライ・エフェクトという言葉にもあるように、

どんな些細なものがきっかけになるかわかりませんしね。ここは慎重に……

「……ということで、明日は学園長に相談してみる。君も一緒にきなさい」

「へ？」

へ？

「その子供先生が女子寮の同級生の部屋に転がり込んだようだな。前例さえ出来てしまえば……こちらのものだ」

これはつまりあれですね。僕を女子寮に住まわせる気満々ですね……。

いつの間に好感度そんなに上がっていたんでしょう。

最初期以外は、『好意』をオーラのようにゆるく放出してる、ちよっと癒し系（自称）状態だったはずなんです……。

「また明日の放課後、迎えにくる」

それだけ言うと、長い髪を華麗に翻してクールに立ち去っていくたつみー。

そして残される僕。

別に決して、そういうことになるのがいやってわけではありませんが、

本編に関わらないよ！　っていった途端にこれはどうなんですかね。

あ、神主さんの呼ぶ声が聞こえる……。

晩御飯の時間みたいですね……。とりあえず難しいことは明日考えよう……。

ハッピー説得

「ふむう……しかしのう」

昨日のたつみーの言葉通りに、今僕たちは学園長室にいます。

「ネギ君は、仮にも教育実習生としての名目があるが、古城君にはそれが無いじゃろう？」

「知る限りの私以外の親類に頼れる者がおらず、身よりもない秋意をまさか学園長先生が放っておくと？」

間髪いれずに、珍しく学園長室の外にも聞こえるくらい声を張って、たつみーが返す。

そういう設定になったんですね……。

「それにしても、龍宮神社でいいじゃろう……。

女子寮にわざわざ住む理由は何かのう」

「こちらに来て何かと心細い子供先生にも、同年代の友人は必要でしょう」

「ふむ……」

目を細めてひげを扱く学園長。

それに、とたつみーが続ける。

「5、6階の寮生から1階にしかない寮の管理人室が遠いという意

見が出ています。

上階にある備品倉庫の管理を兼ねた、寮管理人見習いを任せるのはどうでしょう？」

「どうでしょう……といわれてものう。まだ古城君は9つじゃぞ」

「学園長も、彼が年の割りにしっかりしていることはご存知でしょう。

広い世の中には、同じ年で中学校の担任を兼ねた先生もいると聞きます」

それを言われると弱い……と思案顔の学園長でしたが、ゆっくりと視線を上げると、やんわりと反論を再開しました。

「しかし真名君の部屋には刹那君もおるからの、部屋には何かと荷物が多くて、子供といえど住めるスペースなぞないじゃろう？」

ああ……ついに聞いてしまいましたね、学園長。

「それは……」

たつみーが口を開こうとすると、タイミングを計ったかのように、学園長室のドアが大きな音を立てて開かれました。

「失礼いたしますわ！ 学園長先生！

それについては私、2－Aクラス委員長の雪広あやかがご説明させていただきます！」

その後ろから、鳴滝風香と鳴滝史伽のコンビが飛び出し、

明石裕奈、和泉亜子、大河内アキラ、佐々木まき絵の運動部カルテットと、

柿崎美砂、釘宮円、椎名桜子のチアトリオが雪崩れ込み、朝倉和美と早乙女ハルナは言い合いながら、那波千鶴と村上夏美はゆっくりと、

それぞれでんでらばらにですが、一丸となって学園長室に入ってきました。敬称略。

広いはずの学園長室が一気に狭く感じられます……。

「過去2年の消耗備品目録を参考に、優先度の低い備品を比較的スペースが余っていた、

3、4階の中階備品倉庫に私どもの方で移動させました。

これには、各階の責任者と寮長も了承済みですわ」

ぽかんとしている学園長と、後ろで大変だったよねー、と愚痴り始める同級生を置いて、

変わらずに委員長さんはまくし立てます。

「それによって、現在の上階倉庫には十分な住居スペースが確保できています。

これは随時、私の個人的な寄贈で家具が増えることも考慮しての計算ですわ!」

再起動する前の学園長に、ここぞとばかりに、たつみーが追い討ちを掛ける。

「分かるとおり、クラスの半数が秋意が女子寮が入ることに賛成してくれています。

これでも、許可はいただけませんか？」

たつみーや委員長、2－Aの皆をゆっくり見回す学園長。

「ふおふおふお」

笑いながら力が抜けたように大きな椅子に背を預けました。

しばらくそのままでしたが、姿勢を戻すと、僕をまっすぐに見ます。

「最後になってしもうたが、本人の意思を確認しておかんとの。

古城君。君はどうしたいんじゃ？」

学園長はもちろん、隣のたつみーを含めたこの部屋にいる全員の視線が僕に集まる。

誰も口は開かない。ここで口を開けるのは僕だけだから。

「はい……その、で、できれば住ませていただけるとありがたい……です」

こんな状況で拒否権できる根性を僕がもってるわけじゃないじゃないですか。

何度も言うけど、別に女子寮が嫌ってわけではないんだけど、

一度住んでしまった、龍宮神社が凄く住み心地が良くて、

色々大変そうだな、って思う気持ちは拭えないのも事実なのです……。

「そうか。そういうことならええじゃろう、許可するぞい」

「やたーっー!!」

後ろで2－Aの皆の飛び跳ねる元気な声がどこか遠くに聞こえます。

そもそも、今日のたつみーの約束の放課後にも早い、お昼休みだろう時間に、
朝倉さんが龍宮神社に來た時点でこうなることは、大体想像がついていました。

おそらくはそのときから放課後までに拡散されたであろう情報が、委員長さんたちの迅速な行動に結びついていたわけでしょう。学園内でたつみーと委員長さんが打ち合わせをしている間、改めて僕に『好意』を寄せてくれた人もいたのだと思います。これでもかと好奇の視線に晒されっぱなしでしたから……。一般教師さんたちもいたので、目を付けられないため『好意』を切れもできなかったのです。

「さあ、ここがあなたのお部屋ですわ。秋意さん」

そして案内される僕。確かに元倉庫にしては綺麗になってるみたいです。です。

さすがにキッチンはないみたいだけど、トイレは付いてるから昔から倉庫ってわけではなかったようです。

床もぴかぴかのフローリング……。

荷物がある床の色とかなり違うんですが、まさかこれ張り替えたんでしょうか……。

僕と委員長さんの後ろにはさっき学園長室にはいなかったメンバーも、

野次馬のように部屋を覗き込んだり話し込んだりしていますが、委員長さんが、また明日にと解散させ、皆僕に軽く挨拶して部屋に戻っていったようです。

最後に委員長さんも、屈むことで僕と手を取り目を合わせながら挨拶をして、部屋に帰りました。

残ったのは、僕とたつみーです。

「あ、あの……ありがとうございます」

「なに、これくらいはな」

軽く見上げてお礼を言った僕に、視線を合わせて答えるたつみー。どちらともなく視線を逸らせないままに、僕はぼんやりこれからのことを考え始めます。

住めば都っていうし、きっとなんとかなるでしょう……。。

W a s h i n g o f l i f e

「よろしく、僕はネギ・スプリングフィールド!」

同い年なんだよね? ネギって呼んでね! と、
凄く嬉しそうに片手を突き出してくるネギ君。

その後ろには、満面の笑みが過ぎて表情が崩れそうになっている委員長と、

そんな委員長を気持ち悪そうに見ている神楽坂さんに、
二人を華麗にスルーして、こちらを微笑ましく見守る近衛さん。

越してきた次の日の放課後。今日は本編だとお風呂イベントの日だったかな?
こんな時間に来るなんて大丈夫かな……本編のフラグ折れてないよね?

「よろしく……古城秋意です」

差し出された手を取る。

やっぱり嬉しそうに、シューイ君だね! と、握った手をぶんぶん振るネギ君。

ネギ君は興奮して話し出します。

曰く、同年代で同性の友達がいなかったのも、とても新鮮だとか、
曰く、実は年上の女性ばかりでちよつと心細かったから、とても心強いとか。

そしてさっきまで立って挨拶していたはずなのに、
いつの間にか、机の上にはお茶やらお茶菓子が用意されていて、
ネギ君と向かい側に座って、女性陣も入ったの歓談会になっていま
した。

僕としては、昨日のうちにたつみと打ち合わせしておいた、
不幸な身の上話をチラつかせたお陰で、幸いあまり突っ込んで聞か
れなかったです。

なんだかんだで空気の読めるメンバーで助かりましたね。

「あ、お手洗い借りるなー」

話がひと段落したところで、席を立つ近衛さん。

トイレのドアが閉まったところで、委員長さんが切り出します。

「そういえば、この部屋にはお手洗いはあっても、お風呂場があり
ませんわね」

嫌な予感がするのか顔をしかめて委員長を睨む神楽坂さん。

「もしよろしければ、秋意さんもネギ先生も私の部屋のお風呂に…
」

それを聞いて、怒りを込めた器用なため息をついて、
委員長さんに食って掛かろうとした神楽坂さん。
しかし、ネギ君の発言を聞いてその手を止めます。

「でも僕、お風呂嫌いなんですよー……」

「なにアンタ、もしかしてこっち来てからお風呂入ってないとか言わないわよね」

ネギ君の方を振り向き、ジト目で追及。

「いえ……その、日本に着いてから色々忙しくて……」

「汚い！ この女のお風呂は危険だから、私たちの部屋のに連れてってやるわ！」

馬鹿力でむんずとネギ君を掴みあげる。

「お待ちなさい！ 抜け駆けは卑怯ですわアスナさん！」

しかし、それを許そうとはするはずもない委員長さんも立ち上がり、すわ、喧嘩勃発かというときに救世主がトイレから帰還しました。

「なんや大声でー、トイレの中にまで聞こえてきたえ。」

お風呂なら、大浴場行ったらええんやないの？」

ところ変わって大浴場。

僕は今、正史の修正力にかくも恐ろしいものなのだなあということ
を、

いたく実感している次第です。

僕の隣には、本で見た銭湯みたいだと、

お風呂が嫌いだといっていたわりには、子供らしく目を輝かせているネギ君。

そしてそのやっぱり後ろには、スクール水着の神楽坂さんと近衛さ

ん、
なぜか大人っぽいビキニ水着の委員長さん。本編よりも増えていますね……。

流されていると、これからちゃんと物語の通りになってくれるんでしょうか。

まあ、多少齟齬は出るかもしれませんが、大筋がそのままなら問題なし……？

そういえば本来されるべきだった、神楽坂さんの苦学生情報も、さっきの歓談の中でちよろっと出て、やっぱりネギ君も感涙してましたね。

これが本当なら、僕も割りと自由にしちゃっても大丈夫なのかな……。

と、ぼーっと考え事をしていて、

目の前ではネギ君の身体をどちらが洗うかで揉めている犬猿の仲の2人が、

わたわたしているネギ君を放置して泡にまみれています。

「もう一人いるんだから、アンタはそっちにいけばいいでしょう！」

「馬鹿力のお猿さんに任せておいては、ネギ先生の柔肌がどうにかなってしまいますわ！」

「さー、シュー君はこっちで身体洗おうなー」

近衛さんに導かれ、こっちはこっちで洗ってもらっちゃいます。人に洗われるのって、凄くこそばゆいですね……。

というか、やっぱり委員長さんはネギ君の方が好きなんですね。

今日は意識して『好意』オーラを引っ込めてるので、

僕の部屋でもいい感じに自分の部屋なのに影が薄かったですし、

このままいてもいなくても変わらないポジションを目指したいですね。

ちっちゃい背中やなーと、空気な僕にも優しい近衛さん含む僕らの横では、

お互い白熱しすぎて息が上がったのか、火花を散らして睨み合う水着姿の女子2名。

「このままではラチが開きませんわね……。

ここは、ネギ先生のお身体をいかに綺麗に洗えるかで勝負です!」
「望むところよ!」

そして本末転倒の流れ。

あややー、と大して困ってなさそうな近衛さんの声を後ろに聞きつつ、

横目でネギ君が2人に揉まれ始めたのを確認。

主人公補正のラッキースケベとでも言いましょうか。

リアルで見ると感慨深いですね……。とても真似できないや。

そんなところで、なにやら更衣室の方が騒がしくなってきた様子。

これはあれですね、クラス全員集合ですね。

以降は、ボイーンやバイーンなどの擬音が飛び交せつつ、登場した皆さんが、

それぞれ神楽坂さんと委員長さんをお約束のごとく観戦か、

『巻き込まれた同情』を発する僕へ遠巻きに憐憫の視線を送るか、
我関せずを貫いてのんびり湯船に入っているかして、時間が過ぎて
いきました。

解放されないネギ君を放っておいて大浴場から出た後は、入浴中『同情』オーラに負けじと近寄ってきた運動部四人組の皆さんに、

そのまま僕の部屋まで見送られる形で帰ってきました。

部屋に入り、着替えを置いて、寝る準備をしようと机を見ると、

『風呂は、寮管理人室を使えるように話を通しておいたぞい』by 学園長。

置手紙がしてありました。

仕事が早いのか、遅いのか……。判断が難しいですね。

とりあえず、明日からはゆっくりお風呂には入れそうで何よりです……。

W a s h i n g o f l i f e (後書き)

3／25 一部表現改訂

ニユー・シング

「ふわぁあぁ……」

大きなあくびをして、ごろんと横になる僕。

もうすっかり馴染んだ自室に敷かれたカーペットはふかふかで、その感触を堪能するために、更にごろごろと左右に寝返りをうってみたり。

そうすると、この1ヶ月でかなり物が増えた部屋の風景が目に入ります。

始めは妙に脚の短くて僕にぴったりの机と、

洋室なのになぜか備え付けられていた座布団がいくつかあっただけなのに、

いまや、前述のカーペットが敷かれ、その上にはお気に入りの座椅子があり、

——この座椅子は肘付はもちろん、低反発で長時間座っても全然疲れな

い、おまけになぜかくるくると軽快に回ることもできる、超優れものなのです——

そのお陰でお古の机はリストラ、現在は脚と値段の高さがアップした新品。

更に僕の身長ほどの3段本棚に、同じく子供用の洋服ダンス、

折りたたむというより、押したたんでコンパクトになる木製の子供用ベッド。

後は、動物の顔を模したクッション複数や、机の上の機能性抜群のスタンド等の小物。

部屋の一角には相変わらず、倉庫の名残として、

鉄の骨組の棚にダンボールがずらっと並んでいます、

僕としてはむしろ狭い部屋のほうがちょうどいいので、

この家具でちよっと手狭になったぐらいが、素晴らしく落ち着く空間です。

委員長さんには、感謝してもしきれません……。

「こんなにたくさん……もらってもいいんですか？」

僕がリクエストした座椅子以外にも、ずらっとそろそろ家具類。

「ええ、もちろんですとも！ それとも……お気に召しませんでしたか？」

視線を合わせるように屈みながら、少し不安げな委員長さん。

僕はそんな視線を受けて、小走りに座椅子に近づき腰掛け、

その低反発の快適具合と、勢いよく座ったため回ってしまったその無駄な機能に驚き、

肘付にしがみつくようにして回転が弱まるまで耐えて、ぴよこんと飛び降ります。

「いいえ！ この椅子も気に入りました。ありがとうございます、委員長さん！」

こういうことは行動で示したほうが良いだろうとの判断でしたが、実際座椅子が想像以上に高性能すぎて、本当に若干テンションが上がってしまいます。

声もちょっとうわずっていたと思います……。

「ああっ……はにかんだ笑顔が！」

クラッと大げさに倒れそうになるのを、後ろの那波さんが受け止めます。

その隣には、委員長さんの様子にげんなりした顔の村上さん。

だけど、受け取ってばかりだと悪いので、僕も何かお礼ができればいいのですが……

「そんな！ お礼だなんて、秋意さんが喜んでくださるだけ……」

考えが口に出てたのかな……、僕の漏れた声に反応するも、一瞬考える仕草。

「そう、そうですわ！ クラスの皆さんやネギ先生ならまだしも、秋意さんから委員長などと呼ばれるのは、少しばかり納得が行きません！」

ぐっと拳を握りしめる委員長さん。

「私のことはぜひ、あやかお姉ちゃんとお呼びくださいっ！」

力強く宣言した彼女の背中にはいつもの花ではなく、ざっぱーんという効果音とともに波飛沫が見えました。

「あ、あやかお姉ち……さん」

「……ぐっはあ！」

「いいんちよが凄い鼻血出したー！」
「あらあら」

ということがあったので、十分に感謝の気持ちは伝えてはいるのですけどね。

設備面でも充実しましたが、お陰で生活面もそこに充実した毎日です。

気を使った健康法は、雨が降っていなければ朝に寮の裏で続けますし、

借りて読んでいる魔法の教本もそこその冊数にはなりました。

また、週末には龍宮神社の神主さんに顔を見せに行っていますし、なにより、口実かと思われた寮管理人見習いの仕事が始まりました。現段階では、この部屋にある備品の持ち出し履歴の作成とその補充だけなので、

生徒さんがいる間は部屋になるべく詰めているだけで、事足りるわけですが。

ネギ君も初顔合わせ以降、結構な頻度で顔を出してくれます。

基本的には、学校であった出来事が話題です。

ドッジボールの件はそこで確認しました。ちゃんとやってたんですね。

後は、授業がどうだったやら、いたずらが酷かったやら、

このままだと、僕は生きる2-A学級日誌になりそうな勢いです。

このあとネギ君側としては、学期末のテストまで特にイベントがないわけですが、

実は最近、ちょっと僕のほうで事件がありました。

いつものように、ネギ君を部屋に迎え入れたまでは良かったのですが、

その日はたまたま、初心者教本その5くらいを読みかけのまま机に放置して、

それをネギ君に見つかるという、うっかりとしか言いようがないミスが全ての原因でした。

一応日本語訳されたものだったのですが、表紙は万国共通だそうで見覚えのある本を懐かしそうに手に取るネギ君を止めようとはしたのですが……。

そのときは一瞬、迫真の『清廉潔白』加減で丸め込もうかとも考えましたが、

もう一度よく頭を捻ってみると、僕って本編関連で頼られようがないですし、

別に魔法を知っていることを教えても、大して影響がないだろうとバラしちゃいました。

その流れで、僕の不老体質にも自然に話が及んだものの、

学園長や少し前に検診に来たお医者さんにもわからないものが、

魔法学校主席卒業程度のネギ君に分かるはずありません。

しかし、いつの間にか形成されていた『友情』理論で、僕も解呪に協力するよ！ という、

ありがたい言質を頂いてしまい、彼の夢の前にひとつ無謀な壁を作ってしまったことは、

素直に申し訳ない、と現在進行形で感じている次第であります。

それからはほぼ意味がわからずに流し読み感覚だった初心者魔法教本を、

ネギ君と一緒に復習しながら、プレゼントされた初心者用杖で練習し始めているわけです。

「プラクテ ビギ・ナル “火よ灯れ”」

絨毯に寝転がったまま、懷から取り出した星の付いた杖を振ります。

「……だ、大丈夫だよ！」

魔力容量の大きさは確かに大事だけど、術の効率化を重視して魔力の運用を頑張れば……」

「具体的に一般的な魔力の人と比べたら、どれくらいなの？」

「えと、中の下……」

「中の下」

「……の下」

「中の下の下」

「……の下くらいだと」

という、ネギ君に僕の魔力の多さを尋ねたときの会話が蘇るようです。

呪文を唱えても何の変化もない星型を見ながら、

魔力が中の下の下の下でも、発動しないんなら関係ないなあと、独りごちる僕。

将来的困らないように、せめて自分を大人の姿にする幻術が目標かな……。

ニュー・シング（後書き）

2／7 予期せぬ文中表示がされていたため修正

運オーエンはやっぱり彼女なのか

「が、学年トップおめでとうございますー！」

桜の木の下、慣れない大きな声を張り上げる僕。

すぐさま、ありがとー！ と、返ってくる2－Aの声。

僕たちは今、学年トップおめでとうパーティを、女子寮の広場で始めたところなのです。

なぜ僕が開会の音頭を取ったかといえば、簡単な話。

集まった彼女らが、自分たちの苦労をねぎらうためのパーティなのだから、

適任者がいるならば誰かに祝ってもらおう、ということになり、手頃な2－Aの部外者として部屋から引っ張り出された自分に、白羽の矢が立ったから。

「やほー、コギっち！ 挨拶お疲れー」

わいわいとやり始める皆さんの中から、3人がそろって僕のほうへやってきます。

2－Aで3人組といえば……そう、チアの皆さんですね。

桜子さんが先頭だって手を振り振り走り寄って、その後ろからいつもの2人。

「桜子さん、美砂さん、円さん、テストお疲れ様です」

「ほんと、超疲れたー！ 景気よくショッピングでもしないと取れ

ない疲れね、コレは」

「春休み前に散財はどうかと思うけど、疲れに関しては同感……」

「にゃははー、期末が終わった今日くらい、羽目はずしたってバチは当たらないよー」

「でしょ？　で、今回はシューイ君にはお世話になったから……」

「それについては、もう2人には足向けて寝られないね」

勝手に話が進んでいきます。これがほんとの女三人寄ればなんとやらですね。

やけに彼女たちとフランクに話している僕ですが、ちゃんと理由はありますとも。

ネギ君が図書館島に潜っているだろう間始まった、クラス委員長命令という名の恐怖政治。

それは、徹底的に布かれた強制勉強令でした。

学校の授業や空き時間内はもちろんのこと、寮の生活中もそれは続けられていたようです。

そこで僕の部屋へテスト勉強から逃げ出したチアの皆さんが転がり込み、

今まで全然接点が無かったお三方と、ちょっとだけ仲良くなれたというお話なのです。

「ふー、間一髪だったわね」

「廊下で監視とか……いいんちょ気合入りすぎだって」

急かされるようなノックの音に呼ばれて、ドアを開けた途端転がり込んで入ってきた2人。

後ろ手でドアを閉じ、疲れたようなやり遂げたような顔をしている柿崎さんと、

あ、と腰のポケットに手をやって、震えていた携帯を取り出すくさみー。

「桜子も朝倉に話が付いたからこっち来るって」

突然な訪問客。しかも意外な面子。

いままでに多少なりとも彼女たちとは自己紹介的な会話をした覚えはあるにせよ、

まさか突然部屋にやってくるとは思ってもありませんて。

関わっても本編に影響のないから大丈夫……って言ったら失礼かも知れませんが、

そういう意味では気兼ねなく接せられるのかな？

心の整理も付いたところで、意を決して話しかけてみよう。

「あの一、どうし……」

「ゴメン！ ちょっと部屋を貸してくれない？」

「いいんちょの監視で、拷問のようにテスト勉強させられてるのよ」

こちらに申し訳ないという風に手を合わせて片目をつぶり、

僕が全部言い終わる前に器用に声を被せる柿崎さん、

それに続いて僕に気づいたくさみーが簡単に状況を説明。

このコンビネーションにより、僕の発言は完全に封殺されました。

つまり、なるほど。寮側の本編では書かれなかったイベントなんですね。

僕という異分子が起こした事件というわけではないみたいなので一安心。

その数分後、桜子さんも合流し、

僕の部屋での座談会が開催される運びとなりました。

仲良く皆で机を囲む形です。チアの皆さんはいつものことなのかもしれないませんが、

僕はあまり馴染みの無い方々なので、

ちよつと緊張&前述の理由でちよつと気が楽な中途半端な心構えです。

「だからさー……なんだって！」

「そうかなー」

「……それもどうかと思うけど」

僕がついつい改めて自分の思考に埋没していると、

どんどんと話題が過ぎ去っていく座談会。

最近の若者のコミュニケーション能力は高いですね。

「そうよ！　いくらなんでもいいinchよも横暴よ！」

湯飲みをタンと、木槌の如く机に軽く叩きつけて感情をあらわにする柿崎さん。

いつの間にやら雑談も数十分が過ぎて、どうやら今日の勉強会の話題になった模様。

「でも最下位脱出しないとネギ君クビになるんでしょ？」

確かにそれなら頑張らなきゃって思うけど……今日はもうずいぶん頑張ったしね」

「結局それってマジなの？　　そういえば桜子が聞いたんだっけ」

ネギ君から直接。と、空になった湯飲みを上半身と一緒にずいと向かいに乗り出し、

その先でもぐもぐしている桜子さんに話を振った柿崎さん。

それに対しては思案するように視線を上にして、うーんと唸り返していた桜子さんでしたが、

口は相変わらず、もきゅもきゅお饅頭を咀嚼しています。

僕は僕で、お茶請けにと出したたつみーが持ってきてくれるお菓子が、

桜子さんを中心に割と売れてくれて、腐らせるよりは良いので助かるなー、とか思ったり。

でも、こんな時間に結構な量食べているのは、年頃の女の子として大丈夫なのかな……。

というのも同時に感じたりするわけなのですが、出した本人が言うことではないですよ。

正面向かいのくぎみーも僕と同じような感想のようで、ぼやいているのが聞こえるけど、

表立って同意ができない自分を許してください。

「そうだよー。学園長からの手紙で、出来なかったら先生失格なんだって。」

手紙を貰うところも直接見たから間違いなし！」

ようやく飲み込んだらしい桜子さん。

「うへー。先生をやるってのも大変だね」

「そんな人事みたいに……」

「皆さん……そんなに成績悪いんですか？」

当然原作知識では知ってるけど、

ネギ君も直前までしらなかったことを、知っているほうがおかしい！……ので、一応聞いておきます。

話を聞いていて思いついた、この後にチアの皆さんに提案したいこともあったりなかったり。

それにいち早く、フフフという怪しい笑い声で答えたのは柿崎さん。

「そう、私たち2-Aは万年最下位！

ちなみにこの中で一番成績がいいのは桜子、次に私、ドベが円！」

「にやはははー」

「もう、堂々と言うことじゃないでしょ！

それに、私たちの成績なんかドングリの背比べじゃない」

「いやー、ビリの円さんが言っても説得力がありませんなー」

「なっ！ 美砂、アンタねえ……」

ぐぬぬって感じのくきみー。

「それなら桜子さん。柿崎さんと釘宮さんに勉強教えてあげたらいんじゃない……」

そしてそんなにお菓子ばかり食べてないで。

いや、食べていてもいいんですけどね。

さっきからもしかしそうに手の内で包装されたお饅頭を持て余してるくぎみーが、

僕には不憫でならないのですよ……。

「教えられるほど勉強なんてしてないよ？」

「部屋で一緒に朝倉に聞いたりはしないの？」

「しないしない。適当にテスト前教科書を眺めるのがせいぜいだよ」。

たまたま直前に見てたところとかが出てるから、点が取れてるのかも」

「私も普段あんまりしてないけど、そんなのに負けるとは……」

更にうなだれるくぎみー。

お饅頭も諦めたのか籠に戻してます。

「でも逆にそれって凄いですよ。毎回ヤマが当たるってことですよね？」

今回も釘宮さんたちと一緒に予想すれば、きっといい点取れますよ」

能力を使って『好印象』な発言でくぎみーを傷つけないようにして

おいて……、

そしてこれこそがたった今しがたの僕の思いつき、名づけてチアル
u c k 値ブースト作戦！

彼女の有り余る運を友達にも分け与える、という画期的なテスト攻
略策なのだ！

偉そうな割に完全に他力本願な点は申し訳なし！

「試してみる価値はあるわね。よし、教科書持ってくる」

釘宮さんが言うが早いか部屋を出て行くと、
いままで静かだった柿崎さんがおもむろに口を開きました。

「確かにそれはいい案かもしれない……。だけど一つ気になること
があるの。

シューイ君、いい？」

えっ！？

「えっ……な、なんででしょうか」

「なんで桜子だけ名前で呼んで、私と円は苗字なの？」

あの後には、ネギ君の話を聞いていたから彼の呼び方がうつった、と
弁解したり、

記念すべき第1回チア三人組期末テストヤマ張り大会が行われたり、
今度からチアの皆さんを下の名前で呼ぶことに決まったりと色々あ
りました。

彼女たちの勝手に進んでいく話を聞く限りでは、

ずいぶんと出来がよかったみたいなので、提案した甲斐があったというもの。

すいません調子乗りました……当然、一番凄いののは桜子さんです。流石大明神様！

「食券も大儲けしたし、この後はお祝いにカラオケ行くよー！」

「シューイ君も一緒に行かない？」

「いいんちよから貰った服もいいけど、お姉さんたちにもコーディネートさせて欲しいし」

その後続けて少年……着せ替え……ロマンが……などと、聞こえた気がしましたが気のせいだと思います。スルーするよ！

「いや……僕は全然歌とかわからないので……」

「そう？ でもお礼もしたいし、春休みにでもどこか出かけようよ」

「その時までには、歌も覚えておけばいいと思うよー」

そんなことを言いながら、また皆の輪の中に戻っていく桜子さんたち。

向こうではちょうどネギ君が千雨さんを連れてきたところみたいです。

バニースーツって初めてリアルで見たわ……。

それにしても歌ですか……こっち来てから聞こうして聞いた覚えがない。

どうしよう、ネギ君に聞くぐらいしか思い浮かばないなー。

他人事だと思っていたけど、僕も勉強をしなければならなくなるな
るとは……。

運オーエンはやっぱり彼女なのか（後書き）

3／26 あまりにも目に余る出来だったので、大幅加筆修正。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5631q/>

最弱最低な転生ネギま

2011年3月26日05時52分発行